

従業員の皆さまへ

週末放射線治療で 「がん医療の均てん化」加速へ

知ってトクする 職域がん対策 — vol.2



日本人男性の3人に2人が、人生で一度はがんにかかります。なかでも、最も多いのが前立腺がん、およそ9人に1人が経験します。

前立腺がんの治療は、手術か放射線治療が中心です。放射線治療は身体への負担が少なく、入院不要で通院で受けることができます。しかし、従来の方法では平日毎日、40回程度の通院が必要でした。この治療回数の多さが働き盛りの患者にとって大きな壁となっていました。

東大病院では、5回の通院で完了する「定位放射線治療」を2016年から導入しており、患者数は今年3月末までに1200例を超えています。従来の40回の照射に相当する効果を、より短時間・少ない回数で実現しています。治療効果も副作用も従来の放射線治療と違いはありません。

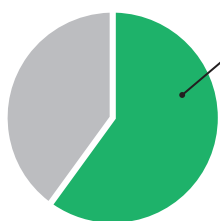
東北大学病院による「週末放射線治療（ウイークエンド

照射）」はさらに先端的です。2週続けて、土曜日のみ通院する前立腺がんの放射線治療が、今年1月から、本格的に始まっています。

この取り組みでは、「MRリニアック」と呼ばれる最新機器を使います。MRIと放射線治療装置を一体化させたこの高精度放射線治療装置は、治療前に高精細なMRI画像を取得し、腫瘍の位置・形状をリアルタイムで確認しながら、ミリ単位で照射位置を補正します。治療中も連続して画像を確認できるため、腫瘍がわずかに動いた場合にも即時に対応が可能です。まさに「夢の放射線治療」と言えます。

このMRリニアックによる週末治療の恩恵を最も受けるのが、平日の通院が困難な働き盛りの患者や、遠方に住む高齢の患者とその家族でしょう。週末だけの通院で、仕事や介護との両立が格段にしやすくなるはずです。

従来の前立腺がんの治療



3人に2人の日本人男性が人生に一度はがんにかかる

9人に1人が
前立腺がんを経験



従来の
治療

約40回
通院が必要

働き盛りの男性にとって、仕事と両立しながら治療を受けるのは難しく、大きな負担に。



東北地方は面積が広く、冬季には雪で移動が困難になる地域もあります。そうした現実の中で、週末治療はまさに「地域に根ざした先進医療」と言えるでしょう。

過疎化とともに地域の基幹病院が疲弊し、今、医療格差が拡大しています。週末放射線治療は、各地に「拠点病院」において「がん治療の均てん化」を図るという従来の考え方を変えるパワーを秘めていると思います。

この取り組みは医療者側にも利点があります。平日の業務スケジュールが緩和され、スタッフの負担が軽減したといえます。休暇も取りやすくなり、働き方改革の点でもプラスになります。

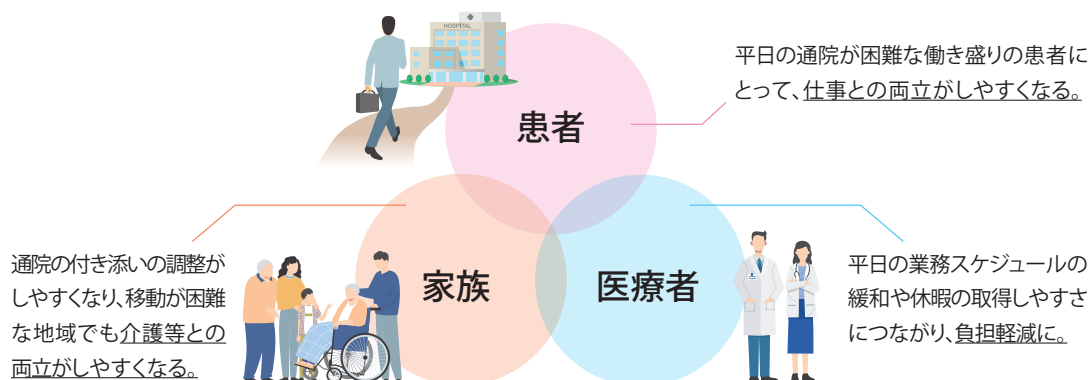
まさに「患者」「家族」「医療者」、すべてにメリットがある“三方良し”の週末放射線治療。しかし課題もあります。MR

リニアックの導入費用はCT型の2～3倍に上るにもかかわらず、診療報酬は同額に設定されており、採算面から、装置の普及が進みにくいという壁が存在します。

東北大学病院で治療を受けた患者や家族からの声を届けてもらいました。「自営業なので休業することなく大変助かった」、「自宅から2時間かかるが、2回だけなので父親を連れてくることができた。地方にしながら最新の治療を受けさせられてよかった」などの声が寄せられています。

どこに住んでいようと、最先端のがん医療が届く社会をめざしていく。その第一歩として、東北大学病院が先陣を切って始めた挑戦に日本のがん治療の未来を感じます。もちろん、仕事と治療の両立の点でも最適なソリューションです。

最先端の「週末放射線治療」、まさに“三方良し”



どこに住んでいようと最先端のがん医療が届く社会をめざしていく。



中川 恵一（がん対策推進企業アクション アドバイザリーボード議長）

東京大学大学院医学系研究科 総合放射線腫瘍学講座 特任教授、厚生労働省 がん検診のあり方に関する検討会構成員、がんの緩和ケアに係る部会座長、文部科学省がん教育のあり方に関する検討会委員など。

東京大学医学部医学科卒業後、東京大学医学部放射線医学教室専任講師、准教授を経て現職。緩和ケア診療部長、放射線治療部門長などを歴任。著作には「がんのひみつ」「コロナとがん」などがんに関する著書多数。日本経済新聞でコラム「がん社会を診る」を連載中。

YouTube

「オトナのがん教育」講座「教えて中川先生!がんって何?がんになっても働けますか?」

好評配信中!

